

大 学 と 教 育

……ドイツの友人との話から……

シュペネマン・クラウス

つい先頃、ドイツ人の友人が私を訪れた。彼はこの二、三年ある日本の大学でドイツ語を教えているが、そのかたわらで日本の大学の歴史についても熱心に学んでいる。ドイツ人といえば、まず理屈っぽいと言われるようにすぐに何かと理論づけたがるのが常である。だからドイツ人と話をするのはあまり楽しいことではない。話の最中にも日本に関する彼等のヨーロッパ流の理論づけが、そうそういつも当を得たものではないことをいつも明確にしておかねばならない。がしかし、時には彼等の論理にも軍配をあげなければならぬこともある。その場合に彼等と話をするのは一層、厄介なことになるのである。

私の友人はその時、日本の大学について非常に鋭く批判をした。彼が基本的に主張しなかったのは、現在の日本の大学が学問や教育とほとんど関係がなく、大学は社会的な位置づけのための道具になってしまっているということであった。そのために彼は、大学の教員なら誰でもが自覚している実状を一例としてあげた。それは多くの日本の大学の学問的レベルが低く、学生達は

いずれにしても卒業は出来るのであるからと、最小限の勉強ですまそうとし、ひどい時には全く勉強をしないといったことである。

この批判をかわそうと私なりに何とか頑張って答えてみた。日本にはこれだけたくさんの大学があるのだから、そのうちの幾つかが非常に高い学問的レベルを持っている、別のところは大きいたことがないということもある。又、ドイツの大学では昔も今も変わらず、社会的な位置づけを与えるという役割を演じて来たではないかということも引き合いに出した。ドイツにも学問のためにだけ大学で学んでいるような学生はまずいないであらうし、行く末は大学の学位を利用して少しでも高い収入をと考えて来たのではないか。

ここで友人は口を閉ざしてしまい、すこし考え込んだが、すぐに次のようなことを、とうとうと述べたのだ。つまり、社会生活への準備や、社会的な位置づけという役目の他に、大学と学問の歴史の中には、一つの伝統があった。学問は本来、人間の自由に深いかわりを持っているも

のである。欧米の近代にあっては、学問は啓蒙的な役割を果たした。カントの言葉を借りれば、啓蒙とは「人間が自分の責任である未成年の状態から脱却すること」となる。従って学問を言い換えると、学問とは人間の社会的解放 (Emancipation) への道であった。この伝統は日本にも影響を及ぼし、それは学問と大学教育が明治時代に果たした役割、例えば日本の近代化などを考えてみればよく分るだろう。高等教育が婦人の解放に如何に寄与したかなども又、しかりである。だからこそ、日本の大学は過去にあっては、多くの専門的な領域を寄せ集めた「大きな学校」などではなかったはずなのだ。それどころか人間の生活を社会の中で、又政治、経済の中で「全体」として把握し、批判的に考え直してみる場所であった。それがつまり英語の “University” やドイツ語の “Universität” という言葉が表わす意味なのだ。しかしこうしたヨーロッパ的な伝統とは別に日本の大学には、もう一つの潮流が根底にある。それはアメリカから入って来た一般教養、人間形成 (liberal arts) のための教育である。前者の伝

統が日本の国立大学で支配的であったのに対して、人間形成という考え方は、特に日本の私立大学の教育理念ともなった。ここで、私自身の立場を意識してかどうか、友人の批判の鋒先は急に日本の私立大学の方に向けられた。例えばこのアメリカ的な考え方に共鳴したある私立大学の創立者の目的は、当時の国立大学のまがい品を作ることはなかったし、国立大学で教授されていた学問をそのままに模倣することでもなかった。又、社会に出てから良い職につけるように、さらに言えば、財界や社会にとって好都合な人材を育て上げるための教育を青年達にほどこそうとしたのでは決してなかった。彼が望んだのは、ビジョンを持ち、判断力や創造力を備えた青年を育てることであった。そしてこの能力によって彼等が現実社会の中で創造的な役割を担い、社会革新のための原動力となることが出来ることを期待したのであった。そのためには、彼自身の考えでは、キリスト教信仰と学問とが不可欠の要素であった。それが今日では、その大学では創立者の考えは単なる……イズムと呼ばれるだけのものに変っ

てしまっている。ほこりのたまったこの主義は、今では入学式、卒業式やその他の祝典といった時に書庫から取り出されてうやうやしく陳列されるだけだそうだと友人は言った。観念的で空論になってしまったこの主義やキリスト教主義は、大学の上層部の中でも、教室の中にでも生き残っていない。

ここで私は友人に黙ってくれるように頼んだ。彼の話しの続きをじっと聞いていられたなかったからである。とはいえ、彼の批判に答えることは出来なかった。友人が述べたことに判断を下すに十分な日本の大学の歴史についての知識が私にはなかったからである。そして同時に私の心の奥底では友人の言ったことが確かに正しいと感じていた。それだけに、一層彼の言ったことが私には酷なものになった。

(大学文学部助教授)

大正初期の同志社

グリークラブの思い出

原 忠 雄

(1)同志社最初の公開演奏会

「同志社百年の歩み」の中の「同志社と音楽」という項の中に、西邸辰三郎先生は「明治四十四年に同志社グリークラブが正式に発足した」と書いておられますが、同志社神学部の中ではそれより以前から同好の士が集って合唱を楽しんでいたようであります。

私が大正二年、神学部に入學した時には、先輩として渡部守成、片桐哲、佐竹直重、岩村清四郎の諸氏はすでに卒業しておられましたが、まだグリークラブの中には浜田格、川端忠治郎、錦織貞夫、清水久男、平賀徳造、田中右左吉などの方々がおられました。

しかし大正二年はグリークラブにとって特記すべき年でした。一度に沢山の人々が入部したのです。私共新入學神学部一年二十名のうちからでも六名がはいりました。平田甫、浜田光雄、上出雅孝、上野義一、笠谷保太郎と私です。これらの人々はその後のグリークラブの中心となりました。又神学部のみならず他部からも、小島応、三宅謙、東義雄、川島良一、蜂谷為

之、美濃部薫、露無文雄、福原某、片桐弘らその他合わして二十数名の諸氏が一度に入部し、グリークラブの形がととのったのです。

また、その年にプリムローズ合唱団が経済部中心に組織されました。これはマンドリン合奏を兼ねた組織だったようです。

そしてその年、すなわち大正二年五月二十四日夕、同志社内にて始めて公開演奏会が同志社チャペルで開かれました。プログラムによりますと、神学部の芦田慶治教授の開会の辞に続いて、二部合唱、四重唱、オルガン独奏、グローバ教授の独唱、プリムローズの合唱もありましたが、その中心となったのはグリークラブがカンタタ「復活」を片桐哲氏の指揮の許に合唱したものでした。プログラムの裏面にも、その歌詞と短かい解説のみが書かれています。しかしまだその頃には合唱は一般化していませんでした。

(2)音楽への関心

当時音楽はまだ女性的なものという考えが一般に強く、柔弱なものと考えられていましたし、四部合唱などは理解されずべ



大正4年3月当時のグリークラブの部員

スを歌う人々を牛々といつてからかかっていました。

私は音楽特に合唱が学生間に理解され、重んぜらるるためには、グリークラブのメンバーがスポーツの方面に進出せねばならぬと考え、野球、テニス、ラクビー、サッカー、剣道、柔道などの方面に選手を送り出すように努めました。私自身も野球やラクビーをやりました。当時の選手制度ではそんなこともできたのです。そのためか、合唱も学生間にとけこんで、重んぜらるるようになり、興味をひくようになり、ますます盛んになって来ました。

(3) 同志社イブの起原

グリークラブは合唱の理解と普及のため、年二、三回「歌の夕」と名づけて主として讃美歌合唱の会を、同志社チャペルで開きましたが、次第に聴衆が多くなって来ました。私の手許に「歌の夕」の第二回、第八回、第九回、第十二回のプログラムが残っています。そのうち九回までは月日は書いてありますが年が書いてありません。しかし第十二回は大正八年六月十四日と書かれています。大正二年秋から始めたとし

て年二、三回は行なっています。この「歌の夕」はその後も続けられ、私の手許に第三十六回のプログラムが残っています。

さてこの「歌の夕」にだんだん聴衆が集るようになりましたので、大正三年十一月二十八日に同志社イブとして催してはどうかということになり、グリークラブのみで「歌の夕」の形式で同志社チャペルで始めたのです。それはクリスマスイブとして十二月二十五日の前夜催さるるのにちなんで同志社創立記念日の前夜催すこととして同志社イブと名づけたのです。それがだんだん盛んになり、他の合唱団も加わり、大正六年頃は超満員で、早く来ねば入場出来なくなりました。現在では一晩のみでなく数日続きますので、同志社イブの名にふさわしくなりました。

(4) 同志社青年会館とグリークラブ

大正三年に鳥丸通りに市電が通るようになりましたので、鳥丸今出川角の宣教師館はその騒音のため宣教師がいなくなりました。そのため同志社青年会はそれを譲り受け、青年会寮とすることになりました。そして大正三年中に畳を入れたり、諸設備を

整えて大正四年一月から一般寮生を入れることとなりました。

その頃は同志社青年会は大学、中学一本となっていて会長は鈴木吉満先生、副会長は私がしていました。ところが大正三年十一月末頃、私は神戸の家に帰り、日曜日の夕、東寮六寮の神学校寮に帰寮せんとすると、東門前に平田甫と小島応が待ちかまえていて、「もう君の荷物はここにない、青年会寮に運んである。」という。驚いてそのわけを聞いてみると二人は「早く青年会寮にはいりたくてたまらずしばしば鈴木先生に早く入れて呉れと願っていた。ついに鈴木先生から原君と一緒にいらしてよいとの許可が出たので、これ幸いと君の荷物と共に僕らの荷物も運んだ。さあ行く」と言って、あっけにとられている私を無理矢理にひっぱって行って青年会寮に入れました。即ち一般入寮生よりも一ヶ月余り早くはいったわけです。その時はまだ設備が充分ととのっておらなかったのです。しかし三人は新しい畳の香をかぎながら三人枕をならべて起居し、狂言のまねごとを練習などして暮し、大正四年一月からは一

般寮生として河原政勝、井尻進、島田始郎らの諸君十数名がはいって来て、正式に青年会寮として発足し私が寮務をとっておりました。

それ以来青年会寮はグリークラブの本部の如くなり、グリークラブはオルガンを購入して青年会に寄附し、コーテットなどの練習をそこでしておりました。

なお、このコーテットが大正六年第一回満鮮演奏旅行に行く面白いエピソードもありますが、すでに予定の頁数が超過しておりますので割愛してこの辺で終わります。

(大正七年大学神学部卒業)

*

*

(大塚節治著)『回顧七十七年』

B 6判六、〇〇〇円

大塚節治先生回顧録刊行会発行

(取扱・同朋舎、校友会)

(生島吉造・松井全共編)

『同志社歳時記』

B 6判六〇〇円

同志社大学出版部発行

(取扱・同志社収益事業課・校友会)

(生島吉造・松井全共編)

『続・同志社歳時記』

B 6判七〇〇円

同志社大学出版部発行

(取扱・同志社収益事業課・校友会)

(同志社校友会編)

『同志社校友会名簿―昭和五十二年度版』

B 5判一〇、〇〇〇円

同志社校友会発行

(取扱・校友会本部・各支部)

(住谷悦治校閲、青山霞村原著、田村敬男編集)

『改訂増補山本覚馬伝』

B 6判二、〇〇〇円

同志社大学出版部発行

(取扱・同志社収益事業課・校友会)

同志社大学出版部発行

(取扱・同志社収益事業課・校友会)

(同志社校友会編)

『同志社校友会名簿―昭和五十二年度版』

B 5判一〇、〇〇〇円

同志社校友会発行

あ　る　報　恩

——「東門のおばさん」の碑——

河　野　仁　昭

今出川キャンパスの、神学館と致遠館の間から相国寺門前通りへ抜ける通用門の傍に、「同志社東門跡」と刻んだ、高さ三十センチほどの石碑があることは、かねてから知っていた。青い自然石の碑である。

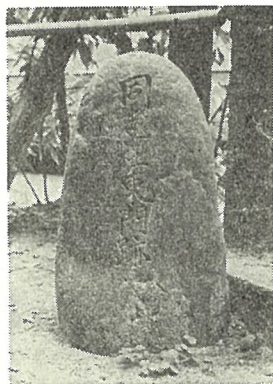
先年、プレハブの事務所を建てたとき、碑をすこし北東へずらしたためか、門の鉄扉をとりかえたせいか、昼間は鉄扉にかくれて見にくくなった。おまけにその場所は、自転車置場になった。碑があることを知らずに通行するひとが圧倒的に多いとしても、それは仕方がないことだろう。

同志社東門跡を後世に伝えるだけのものなら、人目につきにくいことは、さほど問題にはならないともいえる。古い卒業生のノスタルジーや、少数の好事家の関心をみだしさえすればよいと考えるひともある。だが、それだけの目的で建てた碑ではないらしいのである。

最近、多少は仕事との関連もあった、明治以来の今出川校地の変遷をしらべてみる気になった。調査の過程で、ふと思いだしたのが東門跡の碑のことである。大正初年まで、碑のあたりから西へのびる新北小路

という路地があり、さらにその数メートル北方、弘風館、明徳館などの北の壁面あたりと推定される位置を東西に、少なくとも大正十年ころまで、石橋通りが貫いていた。その通りの北側一帯が、薩摩藩邸跡の同志社校地だった。そのころまでは、正門は弘風館の北側にあり、石橋通りにむかって開かれていたことが、当時の校地略図や卒業アルバムなどによって確認できる。有終館あたりの一面は、いわば飛び地で、右の二本の道路によってへだてられていたのである。その飛び地がメイン・キャンパスとつながったのはいつか、確かな年代はわからない。もし東門を設置した年代が確定できれば、おそらく有力な手掛りになるはずである。まさか公道に門を作るはずはないし、弘風館の北側と二カ所に設ける必要もないはずだ。東門跡の碑には、門の設置年月が刻まれているかも知れない。

ある土曜日の午後、自転車をとり除き、生垣の有刺鉄線を気にしながら、碑の裏側を覗いてみた。すると、表の文字とほぼおなじ大きさの文字で、「野崎昌さんを偲んで」と刻んであった。ほかに文字らしいも



「同志社東門跡」の碑、表面（左）と裏面

のは一字もない。期待はずれたが、その数文字によって、碑を建てた意味は即座に理解できた。これは、東門跡を示すものにはちがいない、だがそれにもまして、野崎昌という人物を記念するためのものなのだ。

野崎昌、野崎昌……。何かで見た名前だ

と思いながら編集所へひきかえして、およその見当で諸記録のページを繰ってみた。するとあった。『同志社新報』第六十号（昭和十六年七月）の最下段に、「野崎昌子姉慰勞金募集」という見出しで、長年勤めた野崎昌さんがこのたび退職されるので、一口一円の慰勞金を募って彼女に贈りたい。申込所は同志社校友会、発起人は、大塚節治、宗藤圭三、南石福二郎、奥村龍三、秋山哲治ら八名、といった内容の記事である。

おなじページ中段に、デントンの記事が写真入りで掲載されている。日米情勢の悪化にともなう、外国人教師は一人去り、二人去り、次々に同志社を去って帰国し、あとは太平洋婦人伝道協会からパイプオルガンを贈られたばかりのデントンただ一人になった。彼女は、「国交断絶の時ラストボートには乗らない、平和回復後のファーストボートこそ自分の乗るべき船だ」と語ったと書かれており、徳富蘇峰から「デントン先生だけは同志社の名譽にかけて帰えすな」と伝言があったとも書かれている。太平洋戦争開戦前夜のこの記事が印象に残

っていて、その記事との関連で、野崎昌の名が、記憶の片隅にひっかかっていたのである。

『同志社新報』のその前月号（第五十九号）にも、野崎の写真入りで小さい記事が出ている。やはり最下段の片隅だが「東門のおばさん去る」という見出しで、「来る日も来る日も受取人の名前を一々黒板に書付けて、十八年の長い間郵便の世話をして下さった。受付のおばさん、野崎昌さんは高齢の故にこの五月を最後として東門を去られ、最寄に身を寄せられる事になった」、落着く先は鎌倉長谷の鈴木方。彼女の多年の労に報いるため目下慰勞金を募集中、といったことが書かれている。

昭和初期に在職された二、三名の方になぜかところ、彼女は一人身で、学生生徒宛の郵便物を手渡してくれたほか、ほろびた学生服をつくったり、取れたボタンを取りつけてくれるなど、親身になって学生生徒の世話が続けてくれたのだそうである。東門の受付は小さい家屋になっていた、十八年間でそこに住んでいた。昭和十六年から逆算すると大正十二、三年ころから

住んでいたことになる。同志社東門が設置されたのは、おそらくそのころだ。

加藤延雄先生の話によると、西門にも聚芳館の西側に受付の小家屋があり、長谷川という子供のいない作業員夫婦が住んでいたそう。ご主人は、廃品を利用して教材を作ったりする手先の器用な、実直で働き者の好人物だったという。

野崎さんは、昭和十八年師走二十日に鎌倉で亡くなった。東門跡の碑は、彼女の永眠を悼んで建てたものなのだ。名も記さずに碑を建てた人たちと、そういう報恩をうけるような生き方を、黙々と十八年間つづけた野崎昌という女性が、ごく近い過去にいた。おそらくいまも、そういう人々がいるにちがいない、ただ、報恩のかたちがちがうだけだろう。同志社は健在だと、唐突にわたしは思った。そのおもしろい静かに、そしてさわやかに、わたしの胸中にひろがった。

東門跡の碑は、もう少しひと目につきやすくしておいたほうがよいだろう。

(本部社史史料編集所事務主任)

徳富蘇峰の牧野虎次喜寿祝賀の詩ならびに書簡

ここに掲げる徳富蘇峰の牧野虎次の七の祝寿の詩ならびに書簡は、この五月、東京における「徳富蘇峰と同志社」と題した公開講演会の案内が機縁となつて、福岡の福岡八百松氏から大谷實学長に申し出がなされ、同志社が寄贈をうけたものである。

牧野虎次は湯浅八郎総長辞任の後をうけて、昭和十三年七月総長事務取扱となり、十六年七月から二十二年三月まで同志社総長の任にあった。はげしい戦争の進む中で、「戦時非常措置万策」によつてまったく姿を変えた学園にあって、困難な同志社の運営に当たった人である。徳富蘇峰は当時、首相東条英機に進言して同志社（大学）の存続を計ったと伝えられる。牧野にとつては、まことに苦しい歲月であつたに相違ない。

この詩ならびに書簡は、総長職を戦後再び総長に就任する湯浅八郎に譲った牧野に贈つたもので、もちろんそれは牧野の喜寿を祝うものである。蘇峰から見れば牧野は五〇代の若さとも思える働き振りで、牧野に総長職の労を謝し、あわせ

て「兼人」の業を進める牧野になお活躍を期待している。詩は「山王岬堂」とある蘇峰用箋にしたためられている。

遑々喜寿叟 意氣凌青春 問君何所樂

奉仕神兼人 頑蘇八十五頑蘇

書簡は牧野の喜寿を祝い、併せて故人となつた留岡幸助、水崎基一の業を偲ぶものである。

遙ニ老台ノ喜寿祝賀ノ報ニ接シ驚喜交々臻ル 迂生ハ老台ヲ少クトモ二十齡割引シテ錯覚シ居タリ。心身双全寔ニ健羨ノ至リニ勝ヘス。仍テ共通ノ亡友留岡水崎両君ノ心ヲモ付度シ燕詩ヲ賦シ以テ微忱ヲ表ス

昭和二十二年六月十五日頑蘇病夫猪一郎 牧野先生 梧右

なお、この書簡には紙背に次のような追白がある。「遑々ノ二字ハ孔子カ孟子カ西ニカケ東ニカケ奔走周旋ノ時ニ第三者カ使用シタル文句ナリ 字書ニ急忙ノ風トアル、牧野老先生ニ対シテ蓋シ餘師ノ語ニ幾シ 妄言一則頑」